

## 韓国古代木簡の調査現況とその形態的特性

朴 仲 煥

訳者 重 見 泰

### 一、はじめに

木簡は紙が存在しない時代や貴重品であった時代に、事務連絡用の文書や帳簿、習書などに使用された紙に代わる文字記録用材である。中国ではこれを「簡牘」と称し、竹製のものを「簡」、木製のものを「牘」と呼んでいる。もともと中国では紙が発明される以前に「簡牘」などを紐で括って冊書を作り、そこに文字や文章を記録していた。しかし、韓国の場合、最も古いものが六世紀のものであり、日本の場合も七世紀前半頃に使用され始めたものとされている。その頃には韓日両国に紙が存在していたといえる。韓国と日本との木簡には冊書として作られたものはほとんど発見されておらず、一点の木簡内で内容を完結させるものが大部分である。中国と比べると、韓日両国の木簡は出現当時から紙と並行する点に特色があり、これによって、紙が正式な文書に対して、補助的記録材として使用されるようになった。そのため、韓国の木簡研究においては紙木併用期

木簡の特性が十分に考慮される必要がある。中国の木簡は、戦国・秦・両漢時代のもので魏晋代以後の木簡とで分けることができる。出土した簡牘の全体数量が集計し難いほどだが、長沙市走馬樓の井戸跡内からだけで三国時代呉の紀年がある呉の木簡（呉簡）約十萬点が発掘されるほど資料が豊富である。<sup>(1)</sup> 日本の場合、木簡の発掘が初めて知られるようになったのは一九二八年の三重県袖井遺跡であったが、古代史研究の史料として注目されたのは一九六一年に平城宮跡から四十一一点の木簡が出土するようになってからである。平城宮跡の木簡発掘後、急速に出土例が増加した日本の木簡は、出土地も宮都遺跡にとどまらず、地方官衙・寺院など全国数百箇所に拡散した。日本国内で今までに報告された出土数は約二十万点に達している。<sup>(2)</sup>

木簡の発掘は、文献史料が限定されている古代歴史研究に多くの新しい資料を提供し研究者らの興味を刺激する。これは、伝承されてきた記録と文書とから扱われてきた歴史が、身近な土中に、今尚、埋もれているという事実から来る感興があるためだろう。また、新たに発見された金石文資料と同様に、木簡には既存の史料から得ら

れない内容が含まれていることもあり、関連する研究者の関心を引いてきた。

筆者は一九九九年から始まった扶余陵山里寺跡遺跡の寺城南側区間に対する六・七次調査を担当したことがある。この発掘中、台地造成土の下部で低湿地状態の広範囲な泥炭層を確認し、泥炭層に対する調査で図らずも二十余点の百濟時代の木簡を発掘することになった。<sup>(3)</sup> 陵山里木簡の出土当時まで、我国では大半が新羅木簡として知られており、百濟木簡は稀な状態であったため、この木簡は百濟史研究の新しい資料として期待された。筆者としては、これら木簡資料に対する報告作業のためにも木簡という遺物自体についての一般的理解が必要となった。本稿はこのような現状から準備したもので、木簡研究発展のための小さな作業として公論を試みたものである。私なりの問題把握から誤謬を犯している部分もあるだろうが、これは研究の基礎段階において、ある程度不可避な問題でもあるだろう。向後の補正作業に期待する。<sup>(4)</sup>

## 二、韓国古代木簡調査の現況

韓国で出土した木簡は中国や日本のものに比べてみると、比較できないほど極めて少ない数量に止まっている。このような現状は低湿地遺跡に対する調査事例が多くない韓国の遺跡調査現況に起因するものと考えられる。韓国木簡の調査研究現況については李成市によって詳細に整理されている。<sup>(5)</sup> ここでは、主に木簡の形態的特徴に注目し、再度、韓国木簡の調査現況を見てみようと思う。李成市によって整理された内容との重複はなるべく避けるが、最近、追加し

て報告された資料や新しい論議点が出ている遺跡は紙面を割愛して扱おうと思う。また、ここでは外来的性格の木簡といえる楽浪遺跡の漢簡を参考資料として含めた。

このような観察範囲から見ると、韓国で木簡が最初に発掘されたのは楽浪の漢墓から出土した漢簡になろう。一九三一年、日本の調査者、小泉頭夫によって大同江南岸の平南大同郡南串面南井里第一一六号（彩篋塚）前室内部から、長さ二三・七cm、幅七・二cm、厚さ〇・六cmの木簡一点が発掘された。<sup>(6)</sup> この木簡には、「縑三匹、故吏朝鮮丞田肱謹遣吏再拜封祭」という墨書が三行で記されている。彩篋塚は後漢末期を前後する時期に築造されたものとして知られており、したがって、この木簡は三世紀前半頃のものと思われることができるだろう。この木簡は、製作者と製作動機などを韓国史の展開過程と関連させて見るならば韓国木簡とは言い難いが、朝鮮半島内で発掘された空間的背景に因って韓国古代木簡の性格を理解するのに重要な資料となり得る。

より厳密な意味での韓国古代木簡発掘史は、一九七五年、慶州雁鴨池から発掘された五一点の木簡から始まる。そして、雁鴨池の木簡が発見された後、今までに十一箇所から約一七三点の木簡出土例が報告されてきた。雁鴨池の木簡は記載された年号、もしくは、干支によって景德王十年（七五一）から恵恭王九年（七七四）の二三年間に該当する時期のものと推定されている。<sup>(7)</sup> 新羅官等のうち十二等の官位である「韓舍」があり、「洗宅」という官司名も出土した。雁鴨池木簡は断面が長方形の板状形態のものが多くを占めているが、横断面方形の四角柱状木簡も含んでおり、断面が円形に近い円柱状のものもある。板状木簡は表面、もしくは、稀に表裏両面に墨書さ

れるが、四角柱状と円柱状のものには、三面の墨書、四面の墨書だけでなく六面にかけて墨書したものもある。書式は表裏両面に一行書きで書いたものが多く、二行書きの部分も発見されている。懸垂用構造としては上端両面にV字形の切込みがあったり、稀に上下端両面にV字形の切込みを入れるものがあり、木簡上端部中央に円孔を穿つものも一点含まれている。

百濟時代の七世紀初頭に創建されたもので調査された全北益山の弥勒寺跡に対する発掘過程でも二点の木簡片が出土した。この木簡は西蓮池南側護岸外部の泥上層から出土したが、出土遺構の性格から百濟時代木簡として報告された。<sup>8)</sup> 二点ともに横断面方形の四角柱状で、一点は四面すべてで墨書が確認されており、一点は一面のみ墨書がある。弥勒寺跡の木簡は欠失品であるため残っている文字は多くなく、「山五月二日」などの少数の墨書が判読されているのみであるので史料的价值は限られているが、百濟地域の地方出土木簡としては初めて出土した例という点で、向後、百濟地域木簡出土の地域的拡散が期待される。それだけではなく、弥勒寺跡遺跡からは木簡とほぼ同大・同形態であるが石材で製作された、所謂、「墨書銘石簡」が出土しており、木簡の機能と性格を理解する上で興味深い資料を提供している。雁鴨池木簡とともに新羅木簡として雁鴨池近隣地域で発掘された慶州月城垓字出土木簡は、墨書内容の文字数が少なく、こうだと言える解釈が成されないでいる。<sup>9)</sup> 一九八四年の試掘調査で出土した一点の場合、板状で下端部両側面にV字形の切込みがある。また他の一点は、断面方形の四角柱状で四面にかけて墨書がある。

百濟から高句麗、新羅への領域変化を経た河南の二聖山城からも

木簡の出土が続いている。二聖山城は京畿道河南市春宮洞、草一洞、廣巖洞など三つの行政洞に位置する二聖山中腹に築造された石築山城である。一九九〇年に行われた二聖山城三次発掘調査では、A地区の一次貯水池から「南漢城」と「須城」の城名が書かれた「戊辰年」銘木簡を始め、木簡十一点が出土した。戊辰銘木簡には報告者によって六〇八年と推定された「戊辰年」という銘文と「道使」・「村主」などの表現が含まれており、新羅が地方で軍事活動を展開していた当時の事態と関連する内容と理解されてきた。<sup>10)</sup> ところが、その後、二聖山城八次調査の過程で、C地区貯水池から「辛卯」の干支が記された新たな木簡が出土した。ここには「褥薩」という高句麗の官職名が含まれているため高句麗木簡と判断されている。二聖山城の辛卯年銘木簡は、最初の高句麗木簡という点で新羅や百濟木簡のみ知られてきた韓国木簡研究史に重要な資料を追加することになった。さらに、「辛卯」銘木簡の報告者は、以前に発掘された「戊辰年」銘木簡も、やはり、製作手法と書体、形態などが「辛卯」銘木簡と同一であり、同じ貯水池の上層から出土した新羅木簡と区別されるとみている。これによると、過去に新羅の軍事活動と関連するものと理解してきた「戊辰年」銘木簡も高句麗によって製作された高句麗木簡として理解しなければならぬだろう。<sup>11)</sup> 報告された辛卯銘木簡の製作時期をそのまま受用すると、この木簡は、一九三一年に発掘された楽浪の漢簡を除き、我国で出土した木簡のうち最初のものになるだろう。二聖山城木簡の形態は大きく二つに分けられる。一つは高句麗木簡として知られている戊辰銘・辛卯銘木簡で、断面正方形の四角柱状をなしている。このうち戊辰年銘木簡は三面に墨書、辛卯銘木簡は四面に墨書されている。しかし、A地区やC

地区の新羅文化層から発掘される木簡はすべて横断面長方形の板状であり、上端部両側にV字の切込みを入れて紐を括れるようにするものや上下両端部に切込みを入れるものなどがある。

慶州皇南洞376遺跡から出土した二点の木簡は、遺跡からの木簡出土層位が八世紀前半と報告されており、「下椽」「仲椽」という表現が入っているため、統一期新羅の財政と収蔵施設に関する資料という解釈を得ている。一点は長さ一七・五cm、幅二cm、厚さ〇・六cmの板状であり、もう一点の場合は横断面方形の四角柱状で、二面に各々一行ずつ墨書を残している<sup>(12)</sup>。

慶州雁鴨池出土品に次いで数量的に多くの木簡資料を提供してくれるのは、やはり、城山山城出土木簡である<sup>(13)</sup>。慶南咸安の城山山城から出土したこれらの木簡は、一九九一年から一九九四年まで行われた発掘調査で全二七点が出土したが、そのうち墨書が確認されるものが二四点に達し、墨書内容も多いほうである。朱甫噉は外位の表記方法から推測して、これらの木簡を、安羅が新羅領域に編入された直後である五六〇年代に作られたものと推定した<sup>(14)</sup>。このような城山山城木簡の製作年代推定には概ね意見が近接しているが、木簡の機能や用途については互いに異なる見解が提示されている。朱甫噉はこれらの木簡を、異なる地域民を動員し、新たに編入された咸安地域に築城しながら分野別責任者たちの人名を記録した名簿と理解したのに対し、李成市など日本の研究者たちは、木簡の形態と記載内容からみて新羅領域内の各地方から城山山城に持ち込んだ物品に付けた荷札とみる<sup>(15)</sup>。城山山城から出土した木簡は大部分が横断面長方形かレンズ形の板状であり、表面もしくは表裏両面に一行の墨書を残している。注目されるのは、この遺跡出土木簡の場合、下

端部の左右側にV字形の切込みを入れるものが多く、一部は下端部に孔を持っているという点である。このような下端部に施した懸垂用構造は尼雅遺跡出土の晋簡にその起源を求めることができると指摘されている<sup>(16)</sup>。

百済の遺跡では最後の都であった扶余地域からの木簡出土が続いている。韓国最初の木簡発掘といえる雁鴨池木簡の発掘から八年後の一九八三年、扶余官北里の推定百済王宮跡遺跡の蓮池から二点の木簡が出土したが、残念なことに墨書は判読できなかった。官北里木簡は二点ともに板状で、うち一点の一面にだけ墨書の痕跡が確認されている。もう一点の木簡には上端部両側にV字形の溝を彫る<sup>(17)</sup>。

その後の一九九五年、宮南池から二点の木簡が発掘されたが、そのうち一点から「西下後巷」・「已達巴斯」など三七字が判読され、王京内の行政地域と人名、地名などの資料を提供してくれている<sup>(18)</sup>。宮南池の木簡は二点に過ぎないが、百済木簡の墨書としては稀なことに多くの文字が判読されたという点でその重要性が認められている。宮南池木簡は断面長方形の板状であり、上端から四・九cmの所に径〇・五cm大の円孔がある。この孔は懸垂孔と見るにはかなり中央側に寄っている点が目にとまるが、他の用途の可能性は考えにくい。

一九九八年には扶餘雙北里の住宅建設事業地区からも木簡二点が発掘された。出土した遺構は百済時代の水路、井戸、建物基壇などであり、この遺構は七世紀中葉頃のもので、相当な規模の官公建築物であった場所と推定されている。木簡の墨書は判読できなかったが、形態は板状で上端部両側にV字形の切込みが入られている<sup>(19)</sup>。

新羅の王京から外れた慶南金海市鳳凰洞の低湿地で発掘された「論語木簡」は、王京から遠く離れている発掘位置とともに、記録

された内容の特異性によって関心の対象となっている。この木簡は論語第五編「公冶長」の句節を記しているが、三国時代に製作された儒教經典の記録を初めて見せてくれたもので、木簡が儒教經典の学習用に製作された可能性を示しており、興味を引く。この論語木簡に関する内容もやはり報告書が刊行されていない状態であり、具体的に知ることは難しい状態だが、木簡が出土した遺跡は、金海一帯の金官伽耶が滅亡した直後、新羅人によって造成されたものという推定も提起されている。このような推定が妥当性を持つものとするれば、木簡の製作時期が六世紀代まで遡り得るだろう。木簡の形態は横断面が正方形に近い四角柱状で四面すべてに墨書が残る<sup>(20)</sup>。

扶余陵山里の木簡は、百濟金銅大香炉と昌王銘舍利龕の発掘で広く知られている陵山里寺跡の中門南側排水施設から出土した。木簡が出土した寺跡南側の排水施設は、後に整備された西排水路の下に位置しており、中門南側地域に対する台地造成土の下で確認されているため、寺の造成初期に作られたものと思われる。陵山里寺跡は五六七年である昌王十三年の銘文がある舍利龕の記録により、百濟聖王の戦死と密接な関連がある発願寺院であると考えられている。したがって、木簡の製作・使用は寺の造成初期から百濟滅亡以前までの間になされたであろうが、層位や遺物状況、そして墨書記録の書体などを通して、泗泚遷都直後の五四〇年前後から威徳王代中頃までの三十余年間に主に製作・使用された可能性が高いと思われる<sup>(21)</sup>。この遺跡からは刻書墨書銘木簡とともに奈率、対徳などの百濟官職名と人名、行政区域などが記録された二三点の木簡が出土した。これらの中で、形態と文字記録方法により注目されるのは、一つの木簡内に刻書と墨書とを一緒に残す刻書墨書銘木簡である。この木簡

は横断面が円形に近い円柱状で、下端部を細く削り出し、長方形の孔に差し込んで木簡を立てられるように作っている。上端部の構造や木簡全体の姿も男根形を模倣しており、形態と記録方法すべてにおいてこれまでに報告されていない新しい類型の木簡資料となっている。これには、天、无奉、奉義などが刻字されており、これら刻字銘文の下に、再度、墨書銘を残している。この木簡の特殊な形態と記録された内容などは、この木簡が呪術的性格の用途に使用されたものであったり祭祀と関連するものであった可能性を示している。残りの木簡には板状のものが多く、表面に一行の墨書を記載したものと表裏両面に記載したものが、二行の墨書を残すものもある。また、断面方形の四角柱状木簡の四面に墨書を残すものもある。定置用構造としては、先述した刻書墨書銘木簡下端部の尖形結合構造が注目されるが、これは長方形の孔に差し立てられる形態という点で、懸垂用構造というよりは定置用構造と呼ばねばならないだろう。この他には、上端部にV字形の切込みを入れたものと上端中央部に円孔を穿ったものも発見されている。

以上で見てきた韓国古代木簡出土遺跡の分布を地図に示したのが図1である。地図に示された空間的分布をみると、やはり三国中、高句麗地域からの出土が多くないことが目立つ。しかし、高句麗地域に残る空白は、逆に、向後の出土可能性を暗示するものともいえる。このような韓国木簡資料の現況を集成して整理すると表1のようになるだろう<sup>(22)</sup>。依然として、出土木簡の数量自体が制限的であるだけでなく、隣接する中国や日本のそれらと比較して、我国の木簡が持つ形態的、時代的特性などが総合的に検討される機会も未だなかったといえる。しかし、これまでの遺物だけでも、韓国の

木簡は古代史研究の新しい資料として一定の可能性を認められるようになった。何よりも、向後、資料増加の可能性が高いという事実が注目されねばならないだろう。

### 三、遺跡の性格と製作時期

韓国木簡の製作時期と形態的特徴を、遺跡の性格と関連して集めてみたのが表2である。<sup>(23)</sup>この表からは、内容が多様になっている韓国木簡資料の変化を読み取ることができる。最近まで、韓国木簡は雁鴨池を始め、新羅木簡が大部分を占めるものとして知られてきた。しかし、最近の資料増加によって、このような認識も新しく変わってきた。変化の重要な契機となったのは、二〇〇〇年度の二聖山城八次調査で出土した辛卯銘高句麗木簡である。この木簡の出現で三国時代三国の木簡の面貌がすべて知られるようになった。また、二〇〇〇年からは扶余陵山里寺跡から二三点の百済木簡が出土し、百済木簡もまた内容上、また量的にも比重が大きくなった。

出土数量で見ると、古新羅と統一期を含めて新羅木簡が最も多いが、木簡出土遺跡の分布数では百済遺跡が五箇所であり、新羅木簡出土遺跡五箇所と同じであることが注目される。このような出土遺跡数の増加は、向後、百済遺跡からの資料増加の可能性が高いことを示しているものと解釈できる。木簡出土遺跡の性格把握には、依然、木簡内容の判読と関連して未解決の問題が多く残っている。例を挙げると、戊辰銘、辛卯銘木簡以外の二聖山城から出土した木簡の性格と関連する問題や、墨書内容についての判読が困難な弥勒寺跡出土木簡の性格を明らかにする問題などがある。出土遺跡の性格

を通して韓国木簡を理解しようとする努力も、このような問題の解決が先行しないことには成果を期待するのは難しいだろう。

表2で韓国木簡出土遺跡を位置別にみると、楽浪の漢簡を除外した十一遺跡中、七箇所が王京遺跡で、王京からの出土が最も頻繁であることが分かる。王京以外では中央から遠く離れた地方の遺跡が四箇所だが、この中には領土戦争の展開過程で戦闘が進行していた辺境としての山城遺跡の比重が際立っている。出土遺跡の性格別にみると、やはり宮園遺跡が三箇所と最も多く、寺刹が二箇所で山城遺跡が二箇所である。その他、官公建物跡と推定される遺跡が一箇所、塚字、工房跡、低湿地と報告される遺跡が各々一箇所ずつ含まれている。遺跡の性格と関連して指摘できる特徴は、韓国の木簡出土遺跡中に墳墓遺跡が発見されていないという点である。中国の場合、墓の副葬品埋納と関連する内容を記すか、もしくは、墓誌石と同じ役割をする墳墓埋納木簡の発見例が多数知られている。<sup>(24)</sup>しかし、韓国の木簡には中国の木簡で多く発見される墳墓埋納木簡を探すことが難しい。このような現状が、まだ発見数量が少数に過ぎない木簡調査の初期段階で現れたものである可能性も念頭に置く必要があるだろう。しかし、墳墓埋納木簡の未発見の現象が、調査の不足に始まったものではないことは明らかである。韓国でこれまで考古学的調査によって発掘された遺跡の最も多いものが埋葬遺跡だからである。このような古墳調査過程で墳墓内部からの木簡出土がない点から推測してみると、墳墓埋納木簡の不在現象は韓国木簡の一つの特徴であると判断しても良いだろう。または、このような韓中木簡における差は文化的差異を反映する現象でもあり得るだろう。古代東アジアの文化伝播の大きな流れの中でみれば、韓国の木簡が中国

木簡の影響を受けなかったということはある得ないだろう。しかし、韓国木簡と中国木簡との間には木簡の機能のような重要な側面で大きな差が見られる。同じ朝鮮半島内部の出土品であっても漢文化の所産である平壤楽浪の彩篋塚出土木簡が墳墓埋納木簡であることに注目すると、そのような差はさらに明らかとなる。楽浪彩篋塚出土木簡と韓国木簡の中で最も古いものと報告された二聖山城の高句麗木簡とは四世紀ほどの時間的隔たりがあるが、朝鮮半島内で使用されていた空間的背景に注目すれば、彩篋塚木簡が持つ墳墓埋納機能が高句麗や百済の木簡に継承されなかった点は、韓中木簡の間に存在する差異を最もよく示している。

韓国木簡の製作時期に関しては、個別の木簡の製作時期について互いに異なる見解が存在可能であり、多くの場合、そのような見解差についての論議が依然として進行中である。本稿は韓国木簡の製作時期を本格的に扱うものではないため、ここでは、木簡の製作時期を、主に報告書上で提示された遺跡の形成時期を根拠に把握した。また、報告書や説明会資料刊行後に発表された文章を参考にして、韓国木簡の製作時期の大まかな様相を探ってみた。表2で見られるように、韓国木簡の製作時期は六世紀初の二聖山城の高句麗木簡から始まるといえる。そして、雁鴨池出土木簡が八世紀中葉まで下るものと理解されるので韓国木簡の使用時期幅は大まかに見て六世紀初から八世紀中葉に至るものであろう。

日本の場合、過去に八世紀の木簡が主に出土しており、近来、七世紀の木簡が発掘されて七世紀の木簡の問題が新しい論点になっている。使用時期の観点で見ると、韓国木簡は、七世紀を遡ることはないと考えられる日本の木簡研究に少なからず意義を持つことに

なった。中国の簡牘は戦国時代と秦漢にかけてのものが大部分であり、樓蘭地方の晋代簡牘を考慮したとしても、戦国時代から晋に至る千余年間使用されたと見ることが出来る。特に、中国では南北朝時代の後期である六世紀に入ると木簡の使用がほとんどなくなる。これは、おそらく紙の普及とも関連する現象であろう。韓国木簡の製作・使用時期は、中国木簡の盛用期といえる漢代・魏晋代から相当の間隔を置いた後だという点で、時間的背景においても中国木簡の使用伝統の直接受容の可能性を懐疑的にさせる。一般的に中国の木簡は戦国・秦・両漢時代のもものが数量面でも多く、内容も豊富である。しかし、魏晋代以後になると、中国の木簡はその使用数量自体が大きく減り、それも大部分墳墓に埋納する名詞と遺策として扱われており、内容もやはり非常に貧弱になることが知られている<sup>(25)</sup>。中国木簡の衰退期が即ち韓国の盛用期になるという時間的背景に因って、中国木簡に現れたこのような変化は韓国木簡の性格を理解する上でも示唆する所が大きい。要するに、そのような共時的背景の中でも韓国木簡は既に末期に入っている中国木簡の一つの特徴である墳墓埋納機能を受容しなかったのである。このような差異は、韓国木簡が中国木簡とは異なる木簡使用の伝統から出発していることを再度確認させてくれる。

#### 四、韓国木簡の形態的特性

韓国木簡は、その性格を把握するために統計的に分析をするにはまだ出土量自体が多くなり、統計作業のための母集団としての規模が充分ではない状態である。また、出土した木簡の中には、報告

書が刊行後にも木簡の製作時期や木簡の機能、木簡を製作した政治体の性格などについての研究が依然として充分ではないものが多い。ここでは、これまで知られている資料を土台に分析を行える部分である規格性調査を試みた。そして、少し踏み込んで木簡の形態や機能などについての若干の検討を加えてみようと思う。

### 1、規格性

韓国木簡の規格性を探るため、これまで知られている韓国木簡の法量を一つに集めてみた。表3と表4はこのような作業を通して韓国木簡の規格資料を集成したものである。欠失品木簡を完形木簡と区別したのは、可能な限り不確実性を除去するためである。また、この調査では長さと同幅との二資料を通して木簡法量を把握しようと思う。この統計では楽浪遺跡出土の漢簡を除外した。楽浪遺跡の木簡は朝鮮半島内で出土した木簡資料として一定の意義を持っているのは事実だが、外来文化の所産として厳密な意味での韓国木簡と把握するのは難しいと考えたためである。集成表で使用する長さと同幅はすべて最大値を基準にし、断面方形の場合は広い面を幅と把握した。但し、報告書上で最大値と最小値との確認が不可能なものは報告書の数値をそのまま利用するはかなかった。図2と図3は、表3・4の資料に集められた数値を基本として韓国木簡の法量の全体的様相をもう少し理解し易くするためにグラフで表したものである。

図2のグラフ上に見られる際だった特徴は、まず、長さにおいて長短の差が極めて大きく分散して現れた点である。このような長さの分布様相は比較資料として活用するために作成した中国魏晋代のもの(図4)と大きく対照を成している。全体的な様相を言うなら

ば、相対的に密集度が高い区間があるにはあるが、規格性を反映するほどの密集度を示す群集はないものと考えられる。図5・図6はこのような韓国木簡の長さと同幅との密集分布様相を計量化してため、各数値別に序列化した後、5cm並びに1cmの範囲ごとに区間別分布状態の百分率を作成したものである。このような作業によって、長さが相対的に密集する区間は完形木簡の場合、十〜二十cm間であることがわかる。すなわち、全体の五十%に達する二六点の木簡が十〜二十cm間の範囲内に位置していることがわかる。

このように、木簡の長さが大きく分散している様相は、完形木簡と欠失品木簡いずれにも同様に観察される。ただ、欠失品木簡で密集分布範囲は、完形木簡より5cmほど短い五〜十五cm間であることが示されている。長さの分布は、集成した資料でみると、二〜三七cmの範囲にかけてであり、扶余陵山里八次調査で追加出土した木簡が既存の最大長を超えて四四cmに達し、二〜四四cmの範囲を示している。<sup>(26)</sup>幅の場合、やはり、一〜四・五cmの範囲内に分散している様相であり、敢えて密集する範囲をあげるならば一・五〜三・五cmのものが多いと見ることができ。このような韓国木簡の規格が持つ意味を中国木簡資料と比較するため、我国の木簡と時期的に最も近い魏晋代木簡の規格を、図2・図3と同じ方法でグラフに示したものが図4である。<sup>(27)</sup>図4で中国魏晋代木簡の法量をみると、九十%以上の木簡長が二四〜二八cmの範囲内に入っていることがわかる。長さが比較的均等に表れており、一定の規格性が存在することを示しているだろう。しかし、魏晋代木簡の場合も木簡の幅は相対的に分散している。また、韓国木簡の幅が大体5cmを超えないのに比べ、魏晋代木簡は10cmを超える木簡が相当数入っており、両国間の木簡

規格の上で指摘できる際立った差異となっている。

中国木簡の中で最も多く発見されている漢代木簡（漢簡）の場合、幅1cmの木、もしくは竹の札に文字を一行記載したものが一般的な形態であり、これを「簡」と呼んだ。漢簡では通常の長さ一尺を「尺牘」といったが、木簡の長さが書物の格を決める規格の存在していたことが知られている。ここでの長さの単位一尺は、もちろん、漢尺の一尺をいい、メートル法に換算すると二三cmに近いものになるだろう。このように普通の文書は一尺、皇帝の詔は「尺一詔」といい一尺一寸、軍書である檄は二尺、論語は八寸、孝経は一尺二寸、春秋は二尺四寸などの規格性が守られていたのである。このような中国木簡の規格性は、図4でみたように、後期の木簡資料でも相対的に密集する分布状態によって確認される。

日本木簡の規格については、多少、相反する視角が共存するようである。館野和己は日本木簡に特定した規格性が存在しないという。長さ二十〜三十cm、幅二〜四cm程度のもが多いが、それより大きいもの、小さいものも多く、色とりどりだといえる。これは中国のように特定の用途に特定の法量が決められていたのではなく、使用するのに適当な法量に作ったと見る見解である。<sup>28</sup>しかし、平川南は、漢簡と同じように整然としたものではないが、日本木簡にも規格性があつたと見る。郡符木簡はもちろんのこと、通常の文書木簡も一尺の二倍程の二尺程度を意識的に採用していたといえるものがある。<sup>29</sup>ここでの一尺は天平尺を意味するものと見られ、これはメートル法に換算すると三十cmほどになる。平川南によれば、日本木簡は、通常、長さ二十〜四十cm、幅は三〜五cm程度の規格を持っているという。

韓国木簡の場合、漢尺より時代がさらに近い二聖山城出土の唐尺（二九・八cm）や高句麗尺（三五・六cm）との関連性について検討してみる必要があるが、本稿で集成した完形木簡の長さの資料を通してみると、精巧な水準の規格性は存在しなかったとみるのが妥当なようである。もちろん、これは木簡の用途や機能、出土遺跡の地域性と関係なく、単純に規格のみ統計化したものであり、一定の限界を含むものである。

## 2、形態ならびに書式上の特徴

木簡の形態においては、横断面が狭い長方形、もしくは、レンズ形ともいえる板状をなすものが最も多い。板状木簡が中国や日本の木簡の場合においても最も一般的な形態であることは周知の通りである。木簡出土遺跡の分布で見ると、益山弥勒寺跡と金海鳳凰洞の二遺跡を除外した残りすべての遺跡で板状木簡が出土している。例外的な上記二遺跡の場合、出土数自体が一〜二点に過ぎず、出土した木簡が遺物複合体の部分的な情報のみを反映した結果のようである。木簡の形態についての観察でまず注目される点は、板状木簡とは異なる横断面が正方形や長方形の四角柱状木簡と、横断面が円形に近い円柱状木簡など、多面墨書木簡が多く含まれている点である。板状木簡が表面や表裏両面のみを記録空間として使用できるのに対し、このような四角柱状・円柱状木簡は三面・四面もしくはそれ以上の面を記録空間として活用できるという点で、記録材としてより高い効率性が認められる。多面墨書木簡の独特な例として雁鴨池出土の円柱木簡の場合、木簡の周囲六面にかけて墨書を残す場合もある。円柱状木簡を含め、このような多面墨書木簡が出土した遺跡は

二聖山城、陵山里、弥勒寺跡、月城垓字、金海鳳凰洞、慶州皇南洞376遺跡、雁鴨池など七箇所だが、このような出土頻度は木簡出土の全遺跡十一箇所の六四％に達する。また、多面墨書木簡が出土した遺跡は六世紀初の二聖山城から七世紀前半と考えられる慶州月城垓字と八世紀後半の雁鴨池にまで至っており、韓国木簡使用の全期間にかけて活用されたことがわかる。これは韓国木簡の形態的多様性を示す資料となり得る。

木簡の書式については、形態的要素と関連するものとして各面での墨書行を調べた。表2の墨書行は一面での書行を示したものである。墨書行の使用においては、六世紀代の木簡である可能性が高い扶余陵山里木簡や官北里木簡で一行書ではなく二、三行書の使用例が現れていることが注目される。日本木簡の場合、七世紀の木簡で一行書が多く、その後、一つの木簡になるべく多くの文字を書き入れる必要から複数行書や表裏両面記載方式が現れたものと知られている。<sup>30)</sup>

しかも、木簡の記載方式の発展と関連して、韓国木簡の場合、六世紀初のものである二聖山城「辛卯」銘木簡から断面方形の木簡材を使用した四面記載方法を使用している点に注目してみなければならぬ。もちろん、多面墨書木簡の性格については多様な解釈が可能であろう。多面墨書木簡を、表面や表裏両面使用の板状木簡よりさらに複雑化し発達した木簡形態と見るならば、一行書から複数行書や表裏両面記載へ発展したという日本木簡の発展過程と比較してみる時、多面墨書木簡の存在は、韓国木簡の初期形態が向後の出土遺物によって、より遡りうることを暗示する資料となるだろう。しかし、多面墨書木簡の記載方法が、板状木簡の表裏両面記載

方法より製作時期が遡る、より古拙な形態のものとみる視角もあり得る。二聖山城出土木簡のうち、戊辰銘、辛卯銘木簡が四角柱状であったのに比べ、より後代に製作されたと見られるA地区やC地区の新羅文化層から発見された木簡が板状であることは、この部分に對する示唆を提供している。

懸垂や定置による構造では、板状木簡の場合、上端もしくは下端に、そして稀に上下両端にV字形の切込みを作るものが一般的である。しかし、少数の場合に上端、もしくは、下端に円孔を穿つものがある。多面墨書木簡の場合、大体、懸垂・定置用構造を発見し難いが、これは、このような類型の木簡の機能とも関連する問題であろう。扶余陵山里で発掘された刻書墨書木簡の場合、下端部を削りだし、長方形の孔に差して立てられるようにしているが、これはやはり木簡の用途が一般的に知られているものとは異なる特殊な性格を持っていたことに始まる構造であったと考えられる。

#### 四、おわりに

韓国木簡は最近に至るまで、長い間、雁鴨池木簡を中心とする新羅木簡が大部分を占めているものとされてきた。しかし、最近、高句麗木簡の出現で三国時代の三国木簡の面貌がすべて知られるようになり、百濟木簡もやはり内容上や量的に比重が大きくなった。出土量で見ると、古新羅と統一期を含めて新羅木簡が最も多いが、木簡出土遺跡の分布数において、百濟遺跡が新羅遺跡と同じ五箇所に至っていることは特記するほどの資料増加だといえる。

遺跡の性格においては、韓国木簡出土遺跡の中に墳墓遺跡が発見

されていない点を指摘できる。これは中国木簡に副葬品関連記録を残す墳墓埋納木簡の発見例が多いことと大きく区別される特徴である。今までの古墳調査状況から推測して、韓国木簡には墳墓埋納の伝統がなかったと判断されるが、このような韓中木簡間の差異は文化的な差を反映する現象でもあり得るだろう。同じ朝鮮半島内で使用されたものでありながら、平壤楽浪の彩塚塚木簡が持つ墳墓埋納慣習が高句麗・百濟木簡に続かないことは、そのような差を示している。韓国木簡の使用時期幅は、二聖山城木簡の六世紀初から雁鴨池木簡の八世紀中葉に至るものとなるだろう。

韓国木簡は、長さと同幅とにおいて長短広狭の差が大きく表れており、明瞭な規格性を反映する様相を発見し難い。韓国木簡の全体的な長さの分布は二〜四四 cm にかけてであるが、長さが相対的に密集する範囲は十〜二十 cm である。幅はやはり一〜四・五 cm の範囲内に分散している様相であり、密集する範囲を探すならば一・五〜三・五 cm とみなければならぬだろう。要するに、完形木簡の長さと同幅とを通してみるならば、韓国木簡に精巧な水準の規格性は存在しなかったといえる。韓国木簡と時期的に近い中国魏晋代木簡の場合、九十%以上の木簡長が二四〜二八 cm の狭い範囲内に入っており、分布範囲が相対的に分散している韓国木簡と異なる面貌を見せている。しかし、魏晋代木簡の場合も木簡の幅は多様であり、韓国木簡の幅がおおよそ五 cm を超えないの比べ、魏晋代木簡は十 cm を超える木簡が相当数あり、両国の木簡形態の顕著な差となっている。

木簡の形態は板状をなすものが最も多いが、板状ではない四角柱状木簡と円柱状木簡が多く含まれている点が目立つ。このような多面墨書木簡が出土する遺跡は、木簡出土の全遺跡十一箇所六四%

に該当する七箇所到達する。また、多面墨書木簡は、六世紀初のものから八世紀後半のものに至るまで、木簡使用の全時期にかけて見られ、韓国木簡の形態的多様性を示している。日本木簡では、七世紀の木簡で一行書が多く、その後、一つの木簡になるべく多数の文字を書き入れる必要から複数行書や表裏両面記載方式が出現したものと知られている。ところが、韓国木簡の場合、六世紀初のものである二聖山城「辛卯」銘木簡から既に断面方形の木簡材を利用して四面記載方法を用いている。多面墨書木簡の広範囲の使用も韓国木簡の形態の一つの特徴をなしているものと思われる。

書式は六世紀代の木簡である可能性が高い扶余陵山里木簡や官北里木簡で一行書ではなく二、三行書の使用例が出現していることが注目される。懸垂や定置による構造としては、板状木簡の場合、上端もしくは下端に、そして稀に上下両端にV字形の切込みを作るものが一般的である。しかし、少数の場合に、上端、もしくは、下端に円孔を穿つものがある。多面墨書木簡の場合には、大体、懸垂・定置用構造を発見し難い。特殊な例として、扶余陵山里で発掘された刻書墨書木簡の場合、下端部を削りだし、長方形の孔に差して立てられるようにしているが、これは懸垂用というよりも定置用と呼ぶのが相応しいもので、韓国木簡の形態の独特な例となっている。

【注】

- (1) 長沙市文物工作隊・長沙市文物考古研究所「長沙走馬樓j22發掘簡報」『文物』一九九九—五期。
- (2) 直木孝次郎「木簡研究の意義」『季刊考古學』第十八号、雄山閣、一九八七。
- (3) 高島英地「古代出土文字資料研究」東京堂出版、二〇〇〇。  
朴仲煥「扶餘 陵山里發掘 木簡 豫報」『한국고대사연구』第二十八輯、二〇〇二・十二。
- (4) 本論は、『國立公州博物館紀要』第二輯に掲載された内容の一部を修正補完したものである。ここでは扶餘陵山里出土木簡と扶餘宮南池追加出土木簡などの資料が報告書未刊などの理由で集成表では扱われていない。しかし、韓國木簡全体の形態的特徴を探ることはここで用いられた資料だけでも可能だと考える。
- (5) 李成市「韓國木簡연구의 현황과 咸安城山山城출토의 木簡」『韓國古代史研究』十九、한국고대사학회편、二〇〇〇。
- (6) 駒井和愛「栗浪—漢文化の殘像」、一九七二、一一五—一二八頁
- (7) 文化公報部文化財管理局「雁鴨池」、一九七八、一一五—一二八頁。  
李基東「雁鴨池에서 出土된 新羅木簡에 대하여」『慶州史學』一、一九七九。
- (8) 高敬姬「新羅月池出土在銘遺物에 대한 銘文研究」東亞大學校大學院史學科碩士學位論文
- (9) 國立扶餘文化財研究所「彌勒寺—遺蹟發掘調査報告書—」II、一九九六、五〇三頁
- (10) 趙由典ほか「月城垓字試掘調査報告書」、文化財研究所慶州古蹟發掘調査團、一九八五。  
趙由典・南時鎮「月城垓字發掘調査報告書」I、文化財研究所慶州古蹟發掘調査團、一九九〇。
- (11) 「戊辰年」銘木簡の年代と内容については次のような文献がある。  
한양대학교・경기도「二聖山城三次發掘調査報告書」、一九九二。  
朱甫暎「二聖山城出土木簡과 道使」『慶北史學』十四、一九九二。  
金昌鎬「二聖山城出土木簡의 年代問題」『韓國上古史學報』十二、一九九二。  
李道學「二聖山城出土木簡의 檢討」『韓國上古史學報』十三、一九九三。
- (12) 漢陽大學校博物館「二聖山城—第8次發掘調査報告書—」、二〇〇〇、二八五—二八八頁
- (13) 釜山廣域市立博物館福泉分館「特別展—遺物에 새겨진 古代文字—」、一九九七。
- (14) 國立昌原文化財研究所「咸安 城山山城」、一九九八。  
朴鍾益「咸安 城山山城 發掘調査와 木簡」『韓國古代史研究』十九、한국고대사학회편、二〇〇〇。
- (15) 朱甫暎「咸安 城山山城 出土木簡의 基礎的 檢討」『韓國古代史研究』十九、한국고대사학회편、二〇〇〇、六一—六七頁
- (16) 李成市「韓國木簡연구의 현황과 咸安城山山城출토의 木簡」『韓國古代史研究』十九、한국고대사학회편、二〇〇〇、一〇二—一〇三頁
- (17) 平川南「日本古代木簡 研究의 現狀과 新視點」『韓國古代史研究』十九、한국고대사학회편、二〇〇〇、一三九頁
- (18) 忠南大學校博物館「扶餘官北里百濟遺蹟發掘報告書」I、一九八五。  
崔孟植・金容民「扶餘宮南池内部發掘調査概報—百濟木簡出土意義와 成果—」『韓國上古史學報』二十、一九九五。  
朴賢淑「宮南池出土百濟木簡과 王都五部制」『韓國史研究』九十二、一九九六。
- (19) 國立扶餘文化財研究所「宮南池」、一九九九。  
李鎔賢「扶餘 宮南池 出土 木簡의 年代와 性格」『宮南池』（附録）、國立扶餘文化財研究所、一九九九。
- (20) 忠南大學校博物館「扶餘雙北(2) 住宅建設事業地區内文化遺蹟發掘調査略報告」、忠南大學校博物館・大韓住宅公社忠南支社、一九九八。  
부산대학교박물관「김해 봉황동 발굴조사 현장실명회차료」並びに報道資料、二〇〇一・七・六。
- (21) 朴仲煥「扶餘 陵山里發掘 木簡 豫報」『한국고대사연구』第二十八輯、二〇〇二・十二。
- (22) この表は朴鍾益「咸安 城山山城 發掘調査와 木簡」『韓國古代史研究』十九、한국고대사학회편、二〇〇〇、二八頁の表を参考にして内容の一部を修正補完したものである。
- (23) 本稿の表と図を作成するのに参考とした個別の木簡資料に関する関連文献は表1の関連文献と同じである。
- (24) 李均名・何雙全「散見簡牘合輯」、文物出版社、一九九〇。
- (25) 謝桂華「중국어에서 출토된 魏晉代 이후의 漢文簡紙文書와 城山山城」

- 城출토 木簡」『한국고대사연구』十九、二〇〇〇・一五七頁
- (26) 국립부여박물관 『第8次 扶餘 陵山里 寺址 현장설명회 자료』、二〇〇二・
- (27) 魏晋代木簡の規格に關連する資料は、謝桂華の論文(『중국에서 출토된 魏晋代 이후의 漢文簡紙文書와 城山山城 출토 木簡』『한국고대사연구』十九、二〇〇〇・一八九～一九〇頁の付録「墓葬에서 출토된 위진대의 簡牘」)に提示された木簡規格を利用した。
- (28) 館野和己「日本木簡の特殊性」『木簡—古代からのメッセージ—』、大修館書店、一九九八。
- (29) 平川南「日本古代木簡 研究의 現狀과 新視點」『韓國古代史研究』十九、한국고대사학회、二〇〇〇。
- (30) 平川南「日本古代木簡 研究의 現狀과 新視點」『韓國古代史研究』十九、한국고대사학회、二〇〇〇・一二三～一二六頁

(Park, Joong whan 韓國国立公州博物館学芸研究室長)

(しげみ やすし 奈良大学大学院文学研究科文化財史料学専攻)

表1 韓国の木簡調査現況

調査期間	出土遺跡	調査機関	木簡数量	主要記録内容	関連文献
1931	平壤彩篋塚	朝鮮古蹟調査会	1点	・故吏朝鮮丞田肱謹遣…。	註6文献
1975	慶州雁鴨池	文化財研究所	51点	・韓舎、洗宅など33点墨書確認。 ・天寶十歳（A.D751）。 ・寶應四年（A.D765）。	註7報告書
1980	益山弥勒寺跡	文化財研究所	2点	・…山五月二日…。	註8報告書
1983	扶余官北里	忠南大学校博物館	2点	・墨痕確認、判読不可。	註17報告書
1984	慶州月城垓字	文化財研究所	31点	・典大等教事、使内、道使。	註9報告書
1990～1991	河南二聖山城 （3～4次調査）	漢陽大学校博物館	21点	・戊辰年銘、南漢城、道使、村主。	註11報告書
1992～1994	咸安城山山城	昌原文化財研究所	27点	・24点墨書確認。 ・仇利伐、陣城、甘文城、大村、一伐。	註13報告書
1994	慶州皇南洞376遺跡	東国大学校慶州キャンパス博物館	3点	・下椋、中椋	註12報告書
1995	扶余宮南池	扶余文化財研究所	2点	・邁羅城、西卍、中卍、後巷、已達巴斯。	註18報告書
1998	扶余雙北里	忠南大学校博物館	2点	・墨痕確認、判読不可。	註19報告書
2000	河南二聖山城 （8次調査）	漢陽大学校博物館	7点	・辛卯銘、褥薩。 ・墨書2点、墨痕2点。	註11報告書
2000	金海鳳凰洞	釜山大学校博物館	1点	・論語「公冶長」句。	註20報告書
2000～2001	扶余陵山里寺跡	国立扶余博物館	23点	・奉義、无奉、天。 ・寶憇寺、子基寺、奈率、對德、六部五方。	註3報告書
			計173点		

表2 遺跡の性格と木簡の形態的特徴

国名	出土遺跡名	遺跡の性格	製作時期	形態並びに書式上の特徴		
				形態	書式	懸垂(定置)用構造
高句麗	二聖山城	山城	6世紀初 (511~548年)	板状四角柱状	表面墨書 三面墨書 四面墨書 一行書	未詳
百濟	官北里	宮苑	6世紀中葉~ 7世紀前半	板状	表面墨書 三行書	上端V字溝
◇	陵山里	寺刹	6世紀中・後半 (540~570年)	板状 四角柱状 圓柱状	表面墨書 表裏両面墨書 四面墨書 刻書墨書混用 一, 二行書	上端V字溝 上端円孔 下端部尖状構造
◇	宮南池	宮苑	7世紀中葉 (634~660年)	板状	表裏両面墨書 二行書	上端円孔
◇	雙北里	官公建物址	7世紀中葉	板状	未詳	上端V字溝
◇	弥勒寺跡	寺刹	7世紀	四角柱状	四面墨書 一, 三行書	未詳
新羅 (古新羅)	城山山城	山城	6世紀後半 (559~570年)	板状	表面墨書 表裏両面墨書 一行書	下端V字溝 下端円孔
◇(?)	金海鳳凰洞	低湿地	6~8世紀頃	四角柱状	四面墨書 一行書	未詳
◇	月城垓字	王城 垓字	7世紀前半	板状 四角柱状	表面墨書 四面墨書 一行書	下端V字溝
統一新羅	慶州皇南洞 376遺跡	工房址	8世紀前半	板状 四角柱状	表裏両面墨書 一行書	未詳
◇	雁鴨池	宮苑	8世紀後半 (751~774年)	板状 四角柱状 円柱状	表面墨書 表裏両面墨書 三面墨書 六面墨書 一, 二行書	上端V字溝 上下端V字溝 上端円孔
外来木簡 (漢)	平壤彩篋塚	墳墓	3世紀初	板状	三行書	未詳

表4 欠失品木簡の法量

出土遺跡(欠失品)	遺物番号	現在長(cm)	現在幅(cm)
雁鳴池	図版185-400,401	16.5	1.7
〃	図版189-434,435	9.0	2.7
〃	〃	4.3	1.8
〃	図版190-444	13.2	2.5
〃	図版190-445,446	4.0	2.5
〃	図版191-452,453	8.5	3.0
弥勒寺跡	大形	17.5	4.2
〃	小形	8.0	3.2
二聖山城3次調査	図43	15.0	4.6
〃	図版44-⑩	18.5	3.5
〃	図版44-①	10.3	1.7
〃	図版44-②	12.2	1.7
〃	図版44-③	12.2	1.35
〃	図版44-⑨	9.7	4.6
二聖山城4次調査	図版42-①	9.1	1.5
〃	図版42-②	8.2	1.6
〃	図版42-③	6.3	1.5
〃	図版42-④	8.8	1.4
〃	図版42-⑥	6.5	1.6
〃	図版42-⑦	4.8	1.7
〃	図版42-⑧	34.8	2.5
〃	図版42-⑨	12.5	3.0
二聖山城8次調査	木簡1	35.0	1.3
〃	木簡6	5.9	1.7
咸安城山山城	1	23.6	4.4
〃	2	11.7	3.6
〃	3	8.0	2.5
〃	4	6.5	1.6
〃	5	5.7	3.0
〃	6	22.7	2.6
〃	13	23.7	3.0
〃	15	16.7	3.4
〃	16	16.0	3.3
〃	19	9.4	1.7
〃	21	12.6	2.2
〃	22	10.4	2.0
〃	23	15.9	1.8
〃	26	20.3	3.1
〃	27	12.7	2.6
扶余官北里		20.7	3.9
扶余宮南池		11.4	2.9
金海鳳凰洞		20.9	1.9

表3 完形木簡の法量

出土遺跡(完形)	遺物番号	長(cm)	幅(cm)
雁鳴池	図版185-398,399	31.8	2.8
〃	図版186-402,403	23.5	3.0
〃	図版186-404,405	17.0	3.0
〃	図版186-406,407	9.35	2.65
〃	図版187-408,409	15.3	2.75
〃	図版187-410,411	11.3	4.2
〃	図版187-412,413	12.5	1.4
〃	図版187-414,415	12.8	1.4
〃	図版187-416,417	13.0	2.6
〃	図版188-418,419	14.5	2.6
〃	図版188-420,421	9.4	2.15
〃	図版188-422,423	8.8	1.45
〃	図版188-424,425	14.5	4.2
〃	図版188-426,427	16.2	4.2
〃	図版189-428,429	28.5	2.5
〃	図版189-430,431	18.0	4.5
〃	図版189-432,433	30.0	5.6
〃	図版189-436,437	11.5	3.8
〃	図版190-438,439	13.0	2.0
〃	図版190-440,441	17.0	1.5
〃	図版190-442,443	15.4	3.3
〃	図版190-447,448	18.2	1.9
〃	図版190-449,450	11.0	3.6
〃	番号なし	37.5	4.5
〃	番号なし	4.0	0.6
二聖山城3次調査	図44-⑤	5.1	1.0
〃	図44-⑥	3.8	1.2
〃	図44-⑦	2.1	1.0
〃	図44-⑧	3.5	1.2
〃	図44-④	14.8	1.6
〃	図44-⑪	33.4	3.3
二聖山城4次調査	図42-⑤	7.1	1.5
二聖山城8次調査	木簡2	25.0	2.7
〃	木簡3	25.2	3.3
〃	木簡4	26.9	3.5
咸安城山山城	7	20.0	2.8
〃	8	17.7	1.7
〃	9	17.5	1.6
〃	10	20.5	2.8
〃	11	20.8	2.8
〃	12	21.1	2.5
〃	14	18.6	2.5
〃	17	19.7	2.0
〃	18	17.9	1.9
〃	20	15.9	2.2
〃	24	16.0	2.5
〃	25	22.8	3.8
扶余宮南池		35.0	4.5
扶余官北里		20.6	4.0
慶州月城垓字		14.8	2.6
〃		33.5	2.2
慶州皇南洞376遺跡		17.5	2.0